



## ベリテ自然派化粧品とは

本「ベリテ化粧品」は、『素肌本来の働きをいかに活性化させるか?』という課題に答えるべく創られました。このために、先ず「有害な化学原料を極力排除」し、「東西の伝統的自然美容術を最大限に活かす」事を基本としました。

これは、所謂、自然派化粧品の前提となるべきですがしかし、残念な事に、「ハーブ・自然」を謳った化粧品の多くが、化粧品薬害の主因である界面活性剤（乳化剤）や発ガン性のタール色素、皮膚バリア機能を劣化する合成溶剤（PG, BG等）、皮膚呼吸を阻害する鉱物油、合成ビニール成分（メチコン、カルボマー等）が配合されています。又、下記に記した様に「ノン・パラベン」を謳う化粧品にも多くの矛盾があり、真の意味での自然派化粧品は極めて少ないのが現状です。



以上を踏まえ、本品は、『本物の自然美容』を研究して創られました。因みに、商標名「ベリテ」とは、仏語で『本物・真実』を意味する〈Verite〉に由来しています。

**「合成界面活性剤」問題：**「界面活性」とは、物質（細胞膜）表面の固有の表面張力の事で、これを人工的に変化させる石油系物質を「合成界面活性剤」といい、代表には、乳液製造に不可欠なPEGソルビタン系乳化剤やシャンプー等に頻用されるラウリル硫酸塩系、弱酸性アミノ酸系合成洗剤、合成樹脂を溶かしてジェル状にする高分子乳化剤（コポリマー）等があります。

これらは、様々な形状の化粧品製造にはとても便利ですが、その「界面活性力」は、当然ながら皮膚細胞膜表面に直接作用し、その生理的構造や膜糖鎖代謝等を破壊するという1次毒性だけでなく、本来、皮下浸透しない水溶性化学物質や、鉱物油等の有害高分子化合物等を「強制浸透」させるという2次リスクがあります。このリスクは、石鹼以外の全ての合成界面活性剤に共通し、仮に、一次毒性それ自体は比較的弱いものであっても、その「強制浸透力」は看過できません。その代表には、水素添加ヒマシ油、リノール酸グリセル等多数あります。

これらの合成界面活性剤は、起源が天然素材である事から、多くの自然派化粧品では「天然系乳化剤」として頻用される事が多いので注意が必要です。

従って、「いかなる合成クリーム（乳液）と自然美容は両立し得ない」という基本的観点から「作らず、使わず」というスタンスが「ベリテ自然美容の核心」です。

**「ノン・パラベン」問題：**最近、防腐剤パラベンの酸化リスクを強調し、「ノン・パラベン」を謳うものが多くみられます。しかし、通常のガラス容器タイプでは、一定の防腐剤を添加しなければ直ぐ腐ってしまい、皮膚への影響は測りしれません。事実、上記タイプの「ノン・パラベン」化粧品の大半が、パラベン代用防腐剤（フェノキシエタノール、ヒノキチオール等）を使用しています。これらは、ノン・パラベンの解決になるのでしょうか？ 答えは「否」です。

何故なら、これらでパラベン同等の防腐効果を上げるには、高濃度使用が不可欠で、逆にパラベン以上の毒性が生まれるからです。周知の様に、「パラベン」には低濃度で広範囲な抗菌スペクトルを持つというメリットと活性酸素リスクというデメリットがあります。

問題は、このデメリットへの対応です。幸い、パラベンは、高分子物質で、単独では皮膚深層に浸透せず、皮膚表面で脱水して急速に失活します。従って、皮下に強制浸透させる界面活性剤と併用しない、活性酸素除去に優れた抗酸化ハーブと併用する、可能な限り添加濃度を少なくする等で、事実上のパラベン・フリーの実現は可能です。

実際、本化粧品発売以来（20数年）、パラベントラブルは皆無と言っても過言ではありません。